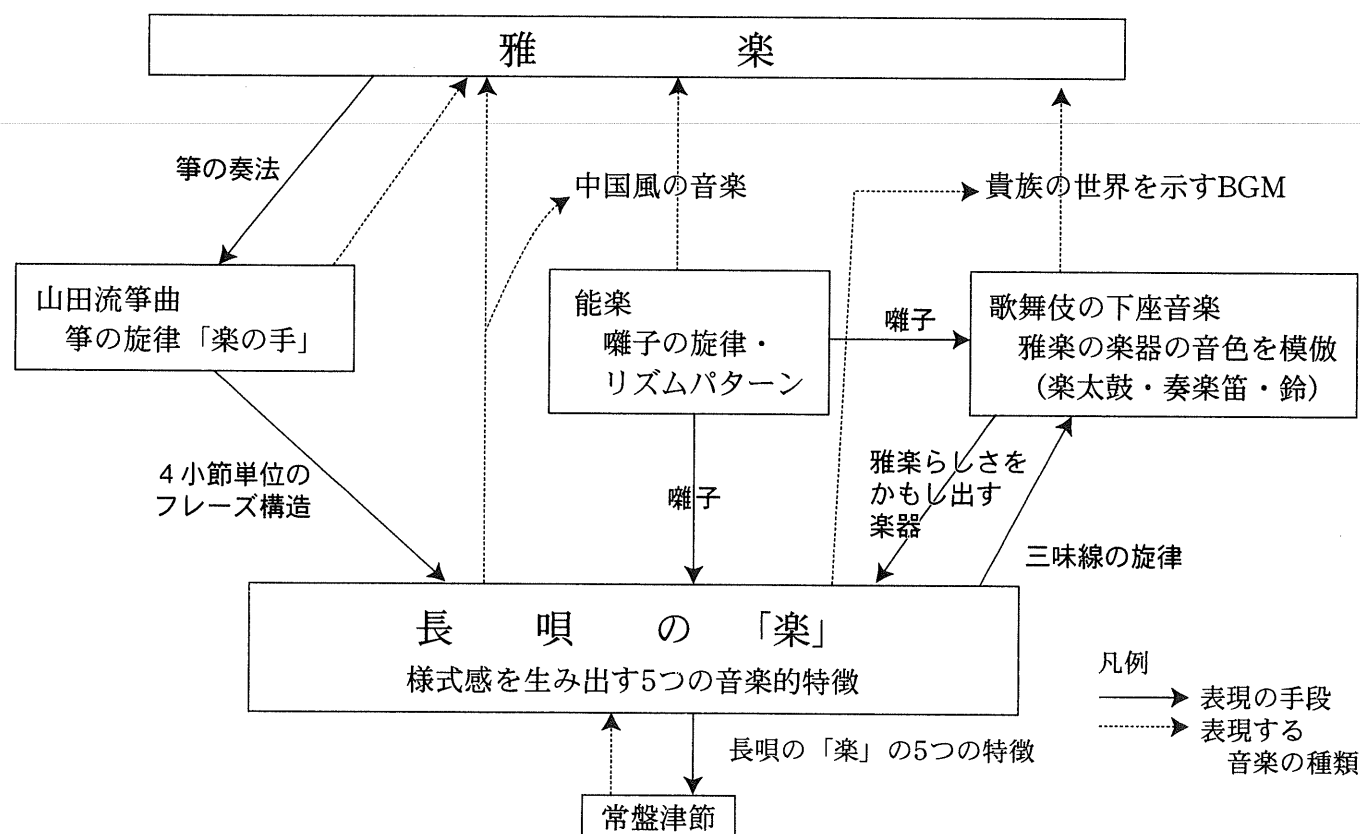


図1 「楽」をめぐるジャンル間の相互関係



身体表現としての^{ほとけまい}仏舞研究

遠藤 綾乃

本研究は、「身体表現としての^{ほとけまい}仏舞研究」として、OHP を使用して発表を進めていきたいと思いま

す。
まず最初に、3枚の写真をご覧ください。1枚目の写真は、京都市の知恩院に保存されている「阿弥陀聖衆来迎図」です。臨終に臨んだ人間を迎えに来た仏の様子が描かれています。こちらの中央の阿弥陀如来を囲んで、大勢の菩薩が、楽器を手に極楽の音楽を奏でていると言われています。

2枚目の写真は、奈良県葛城郡の当麻寺に伝わる「二十五菩薩来迎像」です。こちらの仏像も、臨終の人間を極楽に導く仏達ですが、一体ずつが異なるポーズで表されています。

最後の写真は、「仏舞」の写真です。和歌山県花園村に伝承され、62年に一度上演される仏教劇です。鬼の世界に仏が出現して、極楽浄土の様を舞踊で描き、人々に仏教のありがたさを説くというものです。

ただ今、絵画と造形と舞踊の3枚の写真をご覧になって、何らかのご感想をお持ちになったと思いま

すが、それは写真を目にした瞬間、無意識に「これは仏だ」と認識したことが前提となっています。なぜ私たちは、このような写真を見て、「仏だ」と認識するのでしょうか。この認識が無意識的にされるということに焦点を当ててみたいと思います。

科学哲学者であるマイケル・ポラニーは、この無意識の認識について、暗黙知という概念を提唱しました。ポラニーがいう暗黙知とは、「語ることができるより多くのことを知ることができる」という、誰もが経験的に実感できるものです。その構造を簡単に説明しますと、図1のようになります【図1—自転車の場合】。例えば、「自転車に乗る」ことを全体相として認識しようとしします。そのためには、身体が、姿勢とか体の向きとかペダルの踏み方といった近接項を感知しなければなりません。そして、このような近接項に依拠した結果、自転車に正しく乗ることができます。ただし、まったくの初心者ならまだしも、普段自転車に乗るとき、いちいちこの近接項を意識することは少ないはずです。この、無意識レベルのでの感知—依拠のやりとりが、「暗黙知」です。

この暗黙知の構造を、本研究の対象である「仏舞」に対応させてみると、遠隔項に「仏の出現」の認知があると仮定すれば、近接項には、造形表現や音楽表現、また仏舞以外の誦経、声明、ご詠歌などの音楽パフォーマンス、お払いやお清めといった儀式的なパフォーマンスなどがあげられます【図1—仏舞の場合】。そしてこの近接項には、舞踊動作も含まれています。舞踊では、造形表現や音楽表現と異なり、人間の身体がそのまま表現体となります。そのような舞踊の根源的価値に迫るためにも、身体動作に注目し、この身体動作の質と量とが、認識のプロセスに大きく介在するという観点で仏舞の動作分析を試みました。仏舞は、人間の精神的な部分に深く根ざす舞踊であるためにそこに内在する表現意図が比較的忠実に読み取ることが可能と考えられます。表現体としての身体動作の分析によって、仏舞に内在する表現意図を探っていきたいと思います。

日本における仏舞の分布は、こちらのようになっています【図2】。本研究で対象とした仏舞は、パフォーマンスの形態や伝承の形態、テーマ性などにこだわらず、「仏舞」という名称を持つ地域伝統芸能としました。ですから、先行研究による芸能の分類に基づくと、抽出した個々の仏舞を取り巻く祭礼全体が、舞楽や田楽、教化劇、法要というように一見異なるジャンルに分けられます。しかし本研究は、あくまでも動作分析の結果から新たな知見を得ようとするものですので、パフォーマンスの性質からみる既存の芸能の分類方法は引用しませんでした。

研究方法は、1997年からそれぞれの地域の祭礼日前後の現地調査と、そこで得た VTR 映像を用いた動作分析を行いました。動作分析の観点と方法は、以下の通りです。

<動作分析の観点と方法>

- I. 動作フレーズおよびポーズの抽出と全体構成の把握
- II. 主なフレーズの動作軌跡の解析
- III. 身体部位別運動要素の相対度の算出
- IV. 手の形態の抽出
- V. 隊形移動の解析

Iでは動作フレーズおよびポーズを抽出して舞の全体構成をみました。IIではIで抽出した主な動作の軌跡を解析しました。IIIでは身体部位ごとに運動の相対度を出しました。IVでは、IIIで手に特性があると判断された仏舞について、手の形態を抽出しました。Vでは、舞人の身体方向性をみるために舞踊隊形を解析しました。

日本の民俗舞踊に頻繁に出てくる舞踊動作に、回転運動と跳躍運動があります。回転運動には、身体を軸にして自転する回転や円を描くように公転する回転などがあります。跳躍運動には、両足で踏み切って片足で着地する跳躍、踏み切った足と同じ足で着地する跳躍、踏み切りと着地の足をかえる跳躍などがあります。こうした回転運動や跳躍運動は日本の民俗舞踊によく使われ、躍動感を伝える舞踊動作ですが、仏舞を動作分析した結果、こうした運動が全くみられないことが判明しました。これを身体表現という視点から解釈しますと、仏舞は躍動的ではない、つまりスタティックな舞踊だということができるでしょう。

それ以外の動作特性は、個々の仏舞の分析結果に相違がみられましたので、具体的な結果を、松尾の^{まつのお}仏舞と田峯^{たのね}の仏舞を代表例として紹介していきます。

【VTR 映像：松尾の仏舞】松尾では、京都府舞鶴市の松尾寺で、毎年5月8日の花祭りで仏舞が舞われます。声明が詠われる中、舞人が一列で現れ行道し、本堂の中に据えられた5畳ほどの舞台上で約18分半、舞を舞います。仏の内訳は、大日如来、阿弥陀如来、釈迦如来がそれぞれ2人ずつの合計6人で、如来ごとに異なる振り付けがされています。画面のように、金色の仮面をつけ、袈裟をはおり、仏によっては、腰鼓、手の振り鼓、ばちなどを携えています。伴奏の楽器は、横笛、箏、羯鼓、太鼓です。

どの身体部位でどのような運動要素が多用されているかを調べるために、身体部位単位での運動要素を抽出し、全体構成に対する相対度を算出したところ、グラフ1のような結果を得ました【グラフ1】。舞人の身体を、体幹、上肢、下肢というように3つの領域に分け、さらにそれぞれの部位での、状態および運動動作を表しました。これは釈迦如来の分析結果ですが、体幹の運動動作が皆無で、下肢は内股を示す内旋状態、上肢は内側にひねった状態、肩の屈曲は伸展の倍に近く、肘は屈曲が大半です。実際にやってみますと、腕以外は頭から脚の先まで直立状態で、肘を屈曲に固定したまま肩を動かす運動です。体全体を曲げたりひねったり、また腕を大きく振り回したりすることではなく、可動域は非常に狭いといえます。次に全身の動作軌跡を図示しました【図3】。太い矢印の線が一連の動作の軌跡です。身体全体で、上肢以外は直立のまま、動きません。その上肢の軌跡は、いずれも身体の離れたところから内方向に向かって求心的に円を描いていることがわかりました。

また、上肢が優位であることを受けて、どのような手の所作を行っているかを調べるために、時間軸に沿って上肢の状態を上肢以外の身体部位の状態と対応させてみると、上肢以外は静止状態であっても、その間手の所作は、数種類のポーズを絶えず変化させていっていることがわかりました。さらに、このときの「手」の状態は常に写真のような特定の形態を形作っていることが明らかになりました【写真1】。これによって、松尾の仏舞は、特に手の所作に特徴があることがわかりました。

ここまでの、身体表現という点から解釈しますと、松尾の仏舞では、人々が仏像や仏画に思い描く

のほぼ同様の“仏”のイメージが舞踊動作に如実に表れているものと思われました。手の所作にみられた特定のポーズは、仏を直接あらわす「印」の表現であると考えられます。日本の仏像は、体の軸は直立に保ち、上肢に表現の多様性を持たせたものが多く、手は印を表すことが多いと見受けられます。

仏舞にみられた身体動作の特性は、まさにこういった造形表現の特性を反映していると思われました。身体という自由に動かせる表現体を用いながらも、上肢以外の動きを抑制し、上肢に動きを集中させることによって仏の出現を効果的に演出しているものと考察されます。では、仏舞とそれを見る人々との関係はどうなっているのでしょうか。

それを、隊形移動という点からみてみますと、3人ずつが等間隔で対称的に並ぶ隊列で、移動は隊列全体が同時に行い、内から斜めに向かい、そして外方向を向くという方向転換を、東西南北の各方角を正面に据えて規則的に繰り返しています【図4】。黒で示した一人の舞人に注目しますと、隊型移動に伴い、舞台のへりに沿って一周していることがわかります。以上のことから、特に舞の正面は定められておらず、四方から舞台を取り巻く観客はどの位置から見ても同様の舞を見ることができるといえ、観客へのアピールが強い演出とみなせます。

次に、田峯の仏舞について検討します。【VTR:田峯の仏舞】田峯では、愛知県設楽町田峯にある高勝寺^{こうしょうじ}というお寺で、毎年2月6日に奉納される田楽の一演目として仏舞が舞われています。画面のように、仮面をつけず、かみしも姿で、扇を手に持っています。約40秒とごく短い舞を数名の舞人が順に舞っていきます。伴奏は横笛と太鼓と鉦です。

身体部位単位での運動要素の相対度は、こちらのようになりました【グラフ3】。体幹は前屈と伸展で、下肢は内旋状態での膝の屈曲伸展です。上肢は外旋状態で肘を屈曲に固定したまま、肩を屈曲伸展させます。これらの動作を実際にやってみますと、このような曲げ伸ばしの反復運動になります。また、動作の軌跡をみると、体幹の特に腰の部分を中心とした遠心的な直線を描く振幅の運動が見出せました【図5】。その動作空間は、左右や後ろにはなく、身体の前方のみで行われることがわかります。

以上の結果を身体表現の点から解釈しますと、田峯の仏舞にみられた、身体の正面方向のみに繰り出される体幹を使った振幅運動は、「神仏への拝礼」や「祓い」「鎮め」といった行為を表しているのではないかと考察されました。

隊形移動は、こちらの図のようになりました【図6】。舞人は常に舞台中央の定位置をとり、90度ずつ方向転換し、最終的には4つの方角に身体の正面を変えて同じ動作を繰り返しています。舞台の周りに、神仏を据えた一つの方角以外は、舞人や伴奏者などが並んでおり、観客の位置はあらかじめ設定されていません。4つの方角で同じ動作を繰り返すというのは、神仏への拝礼を意味する「四方拝」を舞踊化したものと思われれます。田峯の仏舞には、観客へのアピールを意図せず、仏そのものを表現するよりも仏に帰依する人間自身の姿を表現しようという演出意図が見出せました。

以上、二つの仏舞について、動作分析の結果とそれに対する身体表現からの解釈を述べてきたわけですが、これらを表にまとめたものがこちらです【表1】。本研究では、七地域の仏舞について同様に分析しました。その結果、松尾に代表される上肢が優位な舞踊と、田峯に代表される体幹が優位な舞踊と

に大別されました。

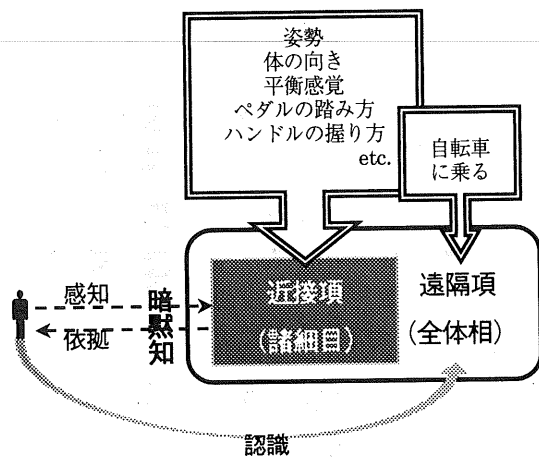
両者を比較すると、異なる演出意図が内在していると考察され、身体動作の見地から、次のような新たなカテゴリーを導き出しました。それは、「仏の姿を人間の身体運動で具現化する舞踊」と「仏に帰依する人間の姿を身体運動で具現化する舞踊」という、二つのカテゴリーです。

発表の最初に、仏の出現を認識する近接項としての舞踊動作について仮説を立てましたが、動作分析の結果、仏の出現を具現化しているのは、上肢運動が優位な仏舞の方のみであることが判明しました。したがって、こちらのカテゴリーの仏舞で見出した舞踊動作の質と量とが、造形表現や音楽表現とともに、人々に仏を認識させる要因の一つになっているものと考えられます。この、仏を認識する要因としての舞踊動作につきましても、本研究で日本の仏像や仏画と酷似した表現が見出せましたことから、また、仏舞をとりまくパフォーマンス、特に声明やご詠歌といった音楽パフォーマンスとの相互的な関連をみる必要性からも、今後舞踊以外の分野も参考にして、仏舞の舞踊表現を掘り下げていきたいと思っております。

一方、人間の信仰を具現化する仏舞の存在は、「仏舞」が一概に仏の出現のみを表現する舞踊ではないことを証明しました。このような演出意図の相違は、動作の質および量の相違から導き出したものです。地域伝統芸能において、何を表現しようとしているかを認識する要因として、舞踊動作の質と量とは無視できない要因であるといえます。暗黙的な部分が大きい舞踊において、明示的な部分に焦点を当てることで暗黙的な部分を解き明かしていこうとした本研究の方法および結果は、今後さらに発展させ、仏教文化に深く関わる日本やアジアの舞踊研究に応用させていきたいと考えております。

以上で発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。

《自転車に乗る行為の場合》



《仏舞を見る行為の場合》

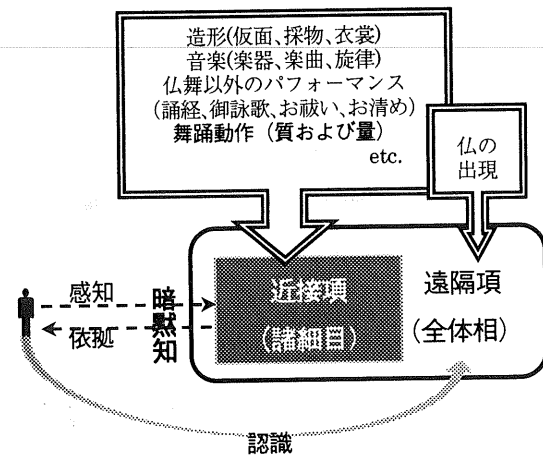


図1. 暗黙知の構造

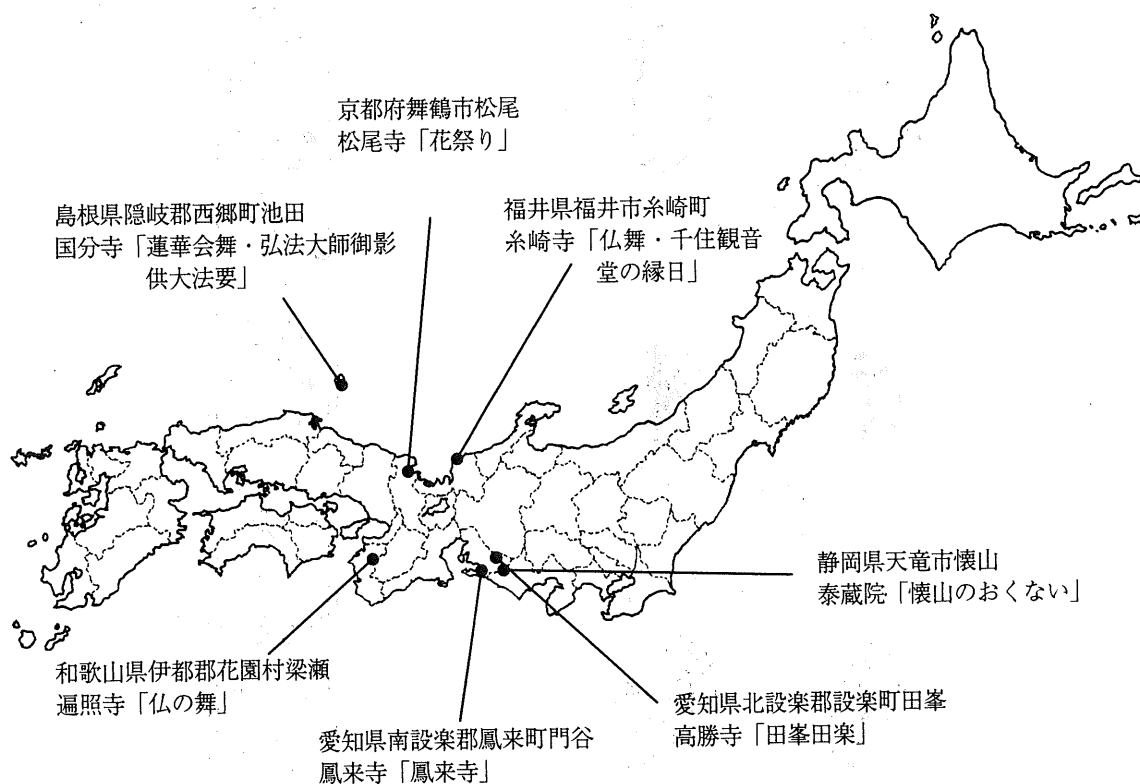
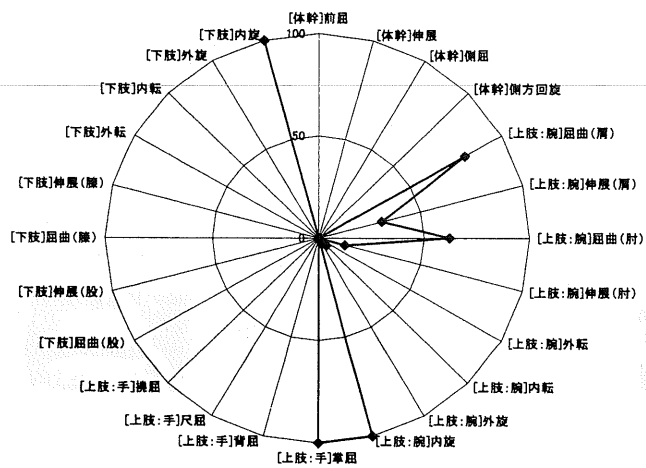


図2. 仏舞の分布



グラフ 1. 身体部位的運動要素の相対度
松尾の仏舞（釈迦如来）

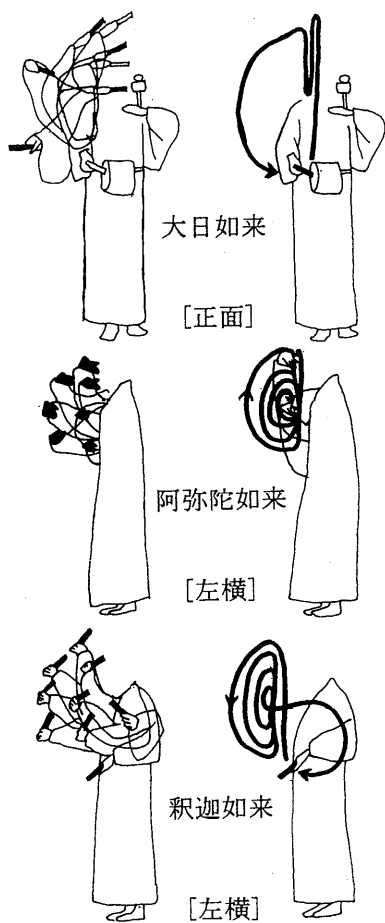


図 3. 動作軌跡 松尾の仏舞

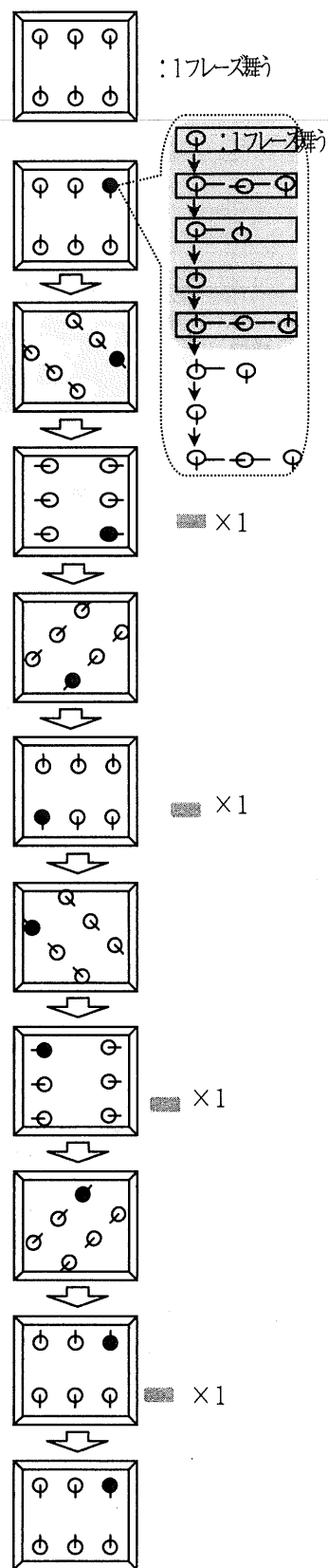


図 4. 隊形移動 松尾の仏舞

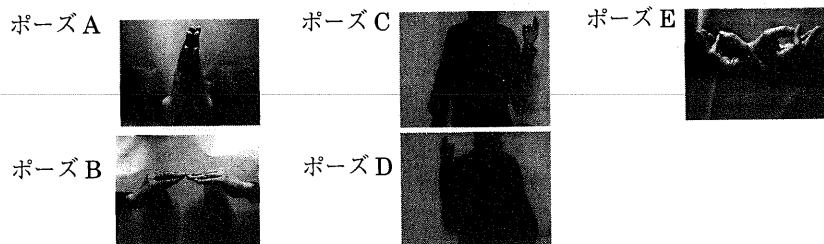
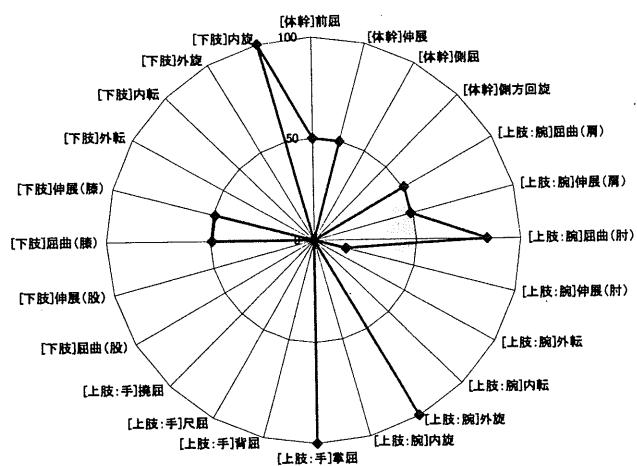


写真1. 松尾の仏舞（釈迦如来）の手のポーズ



グラフ2. 身体部位的運動要素の相対度
田峯の仏舞

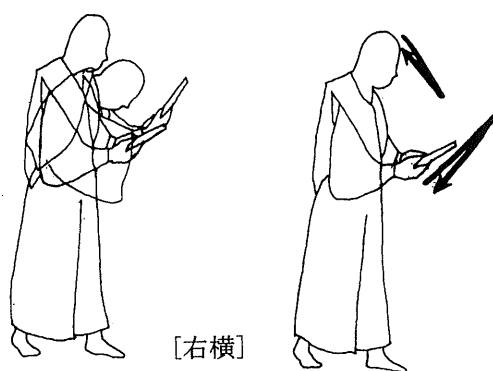


図5. 動作軌跡 田峯の仏舞

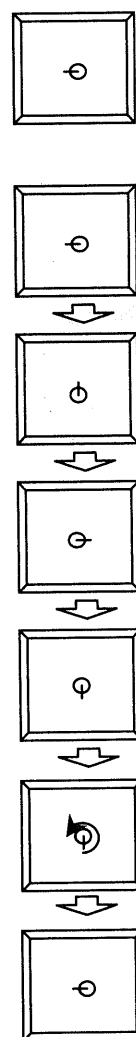


図6. 隊形移動 田峯の仏舞

表1. 運動特性からみた仏舞の身体表現

| <div>仏舞</div> <div>比較要素</div> | 松尾 糸崎 花園 隠岐 | 田峯 鳳来 懷山 |
|--|--|---|
| | 非回転運動・非跳躍運動 | |
| 舞踊動作特性 | 上肢運動の優位性 上肢の求心的・曲線的軌跡 特定の手のポーズ 全方向への身体方向性 | 体幹運動の優位性 体幹の遠心的・直線的軌跡 一定方向への振幅運動 特定方向への身体方向性 |
| ↓ | | |
| <div>解釈</div> | スタティックな舞踊 | |
| | 「印」(直接的な仏の表現) 仏のイメージの写實的描写 観客へのアピール＝開放的 | 「拝礼」「四方拝」「五方拝」「祓い」「鎮め」 仏に帰依する人間の姿 観客への非アピール＝閉鎖的 |
| ↓ | | |
| <div>仏舞の身体表現</div> <div>(新たなカテゴリー)</div> | <u>仏の姿を人間の身体運動で</u> 具現化する舞踊 | <u>仏へ帰依する人間の姿を身体運動で</u> 具現化する舞踊 |